

大分地方の「先縄文」について

—大分市庄ノ原・鶴崎市明野—

大副 塚 昭 憲
そえ
 大 塚 昭 憲
 副 塚 昭 憲
 塚 昭 憲



昭和三十六年春、大分市文化財委員の富来隆（大分大学助教授）、大塚昭憲（大分市碩田中学校）、杉崎重臣（大分市金池小学校）の三氏の間で、本年度は、大分市の遺跡調査（主として縄文・先縄文）をしようという話になった。たまたま大分市庄ノ原が、ブルトーザーで開墾が始められたことを耳にし前記三人で現地を訪ずれた。

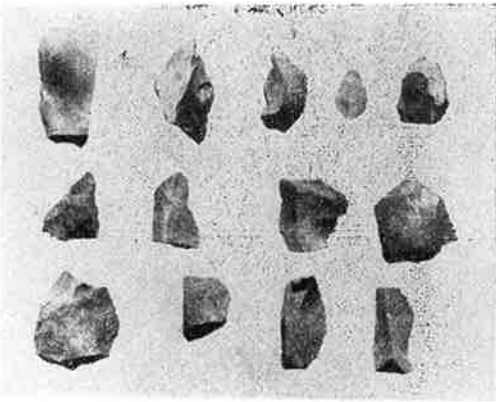


開墾地は、海拔約一〇〇米のほぼ平坦な台地上の南縁で、沙門川の水源地をなす湧泉の南一〇〇米の地点、亀塚とよばれる前方後円墳のすぐ南西の地点である。

おどろくほどの縄文土器片が散布していた。その割には石器類は非常に数が少ない。

とにかく大遺跡である

ので「大分県民族・社会学会」の共同調査の仕事の一つとして前記の諸氏の外、佐藤暁（日田町文化財委員）、副雅幸（碩田中学校）、二宮昭二（賀来中学校）、藤内喜六（別府市朝日中学校）、碩田中学校生徒数名と、本年四月までに約十回ほど出かけ、土器片・石器類の地表採集・層位状況をしらべた。ブルトーザーは深さ一米以上におよんで掘りかえされているために、土器・石器類は一度に拾集される。このようなた



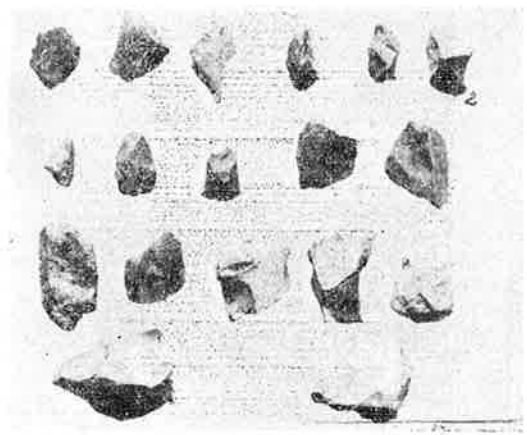
め、層位調査はだめかと思われたが、幸運にもブルトーザーのかからないわずかな地点の壁面で、地表下一五・二〇〇ほどのところ、縄文前期の、四〇・六〇〇ほどの間に縄文早期の包含層があることが確かめられた。それより以下はローム

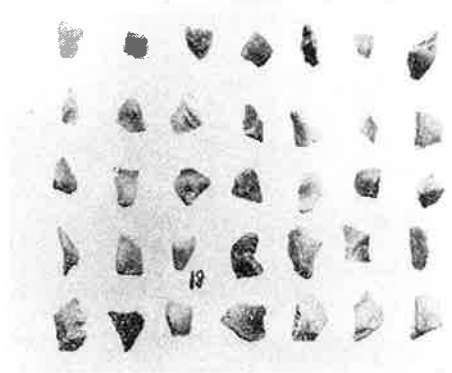
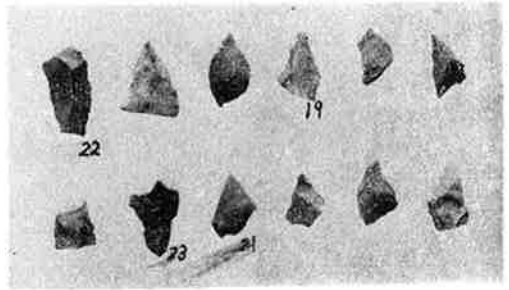
層であり、黒曜石の破片が、地表下七十糎ほどのところで発見された。

このことからすれば「先縄文」期の石刃類は、ほぼこの辺り（七〇・八〇糎ぐらい）に存在するものと推測した。

（本誌記者、口絵参照）

三十七年の四月二十九日、六塚、副と碩田中学校生徒数名は、鶴崎市明野の鬮墾地を調査した。ここは二目川の上流（天然塚の東南）、標高約四十米にブルトーザーを入れ開墾してあるため、出土状況は、はつきりしない。しかしおびただしい石器類が出土していた。鬮墾地の西側の畑が未だ残されているので、層位研究は、ここで可能だろうと思ひ、たびたびでかけて機会をまつている。





(図・写真の 3・4・5・6・10・11および本誌前号の口絵下段は庄ノ原台地、その他はすべて明野台地の採集にかゝる。)

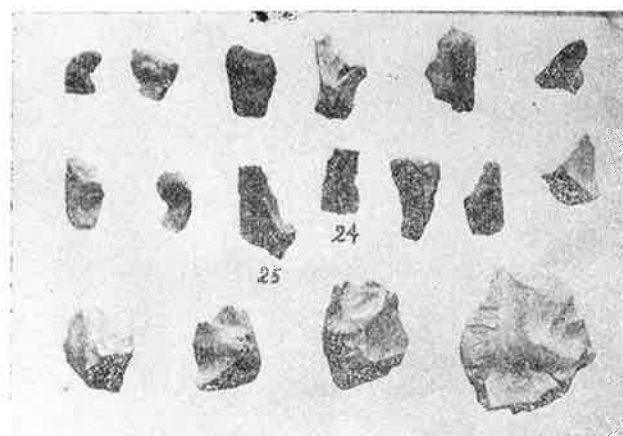


tool, Graver, Point, Flaketool, Chopper, 鶯嘴状石器、各種形様石器などの多きにわたり、その数実に二百有余にたつする。

大分市庄ノ原台地、鶴崎市明野台地より採集された石器を日本考古学講座三卷三十七頁(術語対照表)によつて分類してみると、*End-Scraper, Side-Scraper, Blade, Hand-drill Notchedpoint, Keeled-Scraper, Microflith, Core-*

石材は珪質粘板岩が大多数で、その外ホルンヘルス、安山岩、硬質凝灰岩、珪岩、黒曜石、チヨコレート色粘板岩、赤色粘板岩など数種を使用している。とくに遺跡の特色として鶴崎市二地区では黒曜石を材料とした石器が採集されなかつた。庄ノ原台地では、姫島系黒曜石と鶴見山系黒曜石とを使

用したと思われるのに対し、鶴崎明野地区では、丹生台地（北海道郡）と同じく大野川上流緒方町一帯に産出する石材を使用していることである。あるいはこの両者に文化的時代のずれがあるとも考えられるが、大分川流域文化圏と大野川流域文化圏とのいわゆる地域差があるのではないかと考えられる。



れる。

遺物個々について少しく述べる。

(図の大きさは二分の一)

一、Coretool

(石核) (図1、2) それ自体石器ではないが、石器を作る素材となる切片を作り出すものである。切片を作る手法によって、

石双石核、おさし

み石核などと呼ばれる。

石核はそれ自体で石器として使われた場合もある。

二、Bare (石刃) (図

3、4) 石双石核から作

られたものをいい、それ自体刃器として使われたほか、他の石器の素材ともなる。この石刃手法は

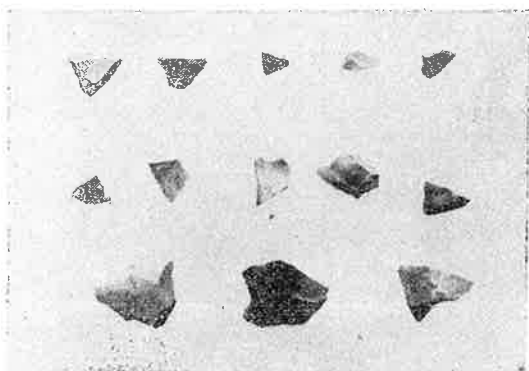
日本の先土器文化の研究

の上で、外国と比較する上で重要である。

三、Glaver (彫刻器) (図5、6) 一般にノミ状を呈する石器であり、その製作手法からいろいろに分けられるが、日本の彫刻刀は編年上のある文化期を示す役割を持つている。荒

屋形彫刻器・神山形彫刻器・白滝形彫刻器などと呼ばれる。

四、Keel-Scraper (舟底形石器) (図7) これに断面が三角形をなす石器であつて、用途はつきりしないが、おそら



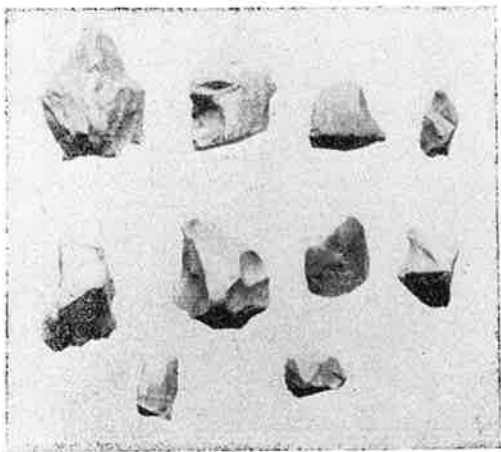
く工作具として使われたものであろう。

五、End-scraper (先刃形石器) (図8、9) 器の先端に細部加工をほどこすが、その部分がかかなり部厚であることが本格的なものである。

六、Side-Scraper (横刃形石器) (図10、11) 器形に変化が

大きい、大体側部に細部加工のあるものをいい、搔器といふより裁断具とすべきであろう。

七、Knife-Blade (ナイフ形石器) (図12、13) おそらくナイフとして使われたものであろう。製作手法により茂呂型・杉久保型・国府型に分けられ、同時期の三つの文化圏を



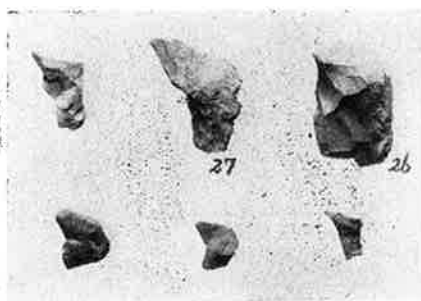
示すと考えられていたが、あるいは年代差があるかもしれない。

八、Microflint (細石器) (図14、15、16、17、18) 日本で発見されている細石器には大きく分けて二つの型がある。一つは細石刃を主体とするもので他は幾何学的細石器と呼ばれるものである。大分地区の細石器は後者に属すると思われる。ともに組合せ石器として使われた。

九、Point (尖頭器) (図19、20、21、22) 槍先として使われたものであろう。特殊な形をした有柄のものは縄文早期との関係を示すものとして注目されている。

一〇、Hand-drill (錐形石器) (図23) 剥片の一部に細部加工により、錐状の先端部を作つて錐の役をする。

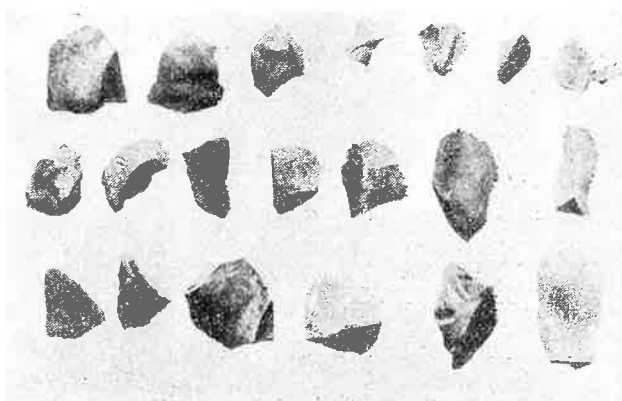
一一、Notched point (挟入石器) (図24、25) 剥片の一部に挟入の彎曲状に細部加工が行われている器具で、棒な



どの丸い面を持つものの加工に用いられる。

一二、Flake 剥片) 剥片剥離により石核から剥離されたもの。それより充分に石器ができる材料、また、そのままでも利用し得るもの。

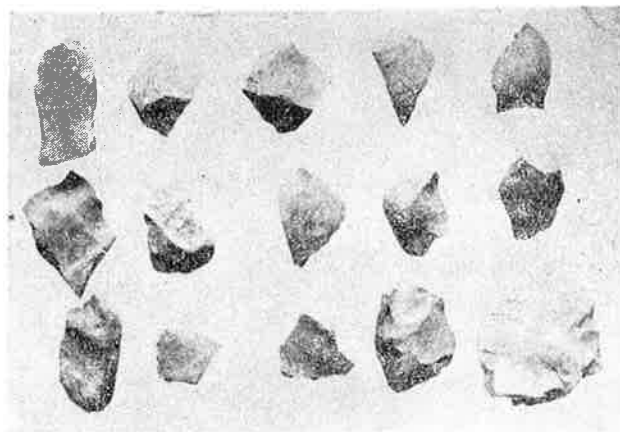
一三、鷲嘴状石器 (図26、27)



一四、各種形様石器 (図28—33) 顔面状石器 (図二八、29)、カレイ状石器 (図30)、磐状石器 (図31)、ソックス状石器 (図32)、扇状石器 (図33) など図形上めざらしい石器があるが、これらは使用上からは、Scraperの意義をもつもの、あるいは Notched-pointとして、また

Graver としての使用価値が考えられる。

一五' Chopper (割器) (図34) 珪質粘板岩を石核として、割器として使用されたものであろう。あるいは石核として他の石器に利用されたか、または使用過程の石器かとも思われる。



最後に、中学教師としての社会科歴史の教育上から少しく述べたい。

「日本最古の文化は縄文文化である」というのが、少くとも昭和二十四年頃までの日本考古学界的定説となっていた。教育の現場に於いてもそ

のように指導してきたものであった。ところが昭和二十四年九月、岩宿遺跡（群馬県）に於いて、縄文文化に先行する旧石器時代文化が確認された。この新事実の発見は各地の研究者たちを刺激し、その後十数年間に、日本全域にわたつて旧遺跡が存在する事が明らかにされた。わが郷土に於いても早水台（日出町）遺跡が発見され、それにひき続き庄ノ原、明野（鶴崎市）とこれら関係石器が開墾によつて表面採集された。本年二月に至り、大野川右岸の丹生（坂ノ市町）ではそれよりはるかに古い第二間水期（約三十万年前）の石器が発見され、相ついで石器文化が、解明されようとし、学界に大きな問題をなげかけている。かくの如く日本旧石器時代が学界に於いて公認され、教材としても採択されつつある現在、歴史教育者・社会科教師としていかに研究し、これら石器を文化財とし教具として利用すべきか、現場教師の現実の問題となつてきた。つぎに考古学資料に対する現場教師として注意しなければならぬことは、単なる考古学マニア・コレクシヨンマニアであつてはならない。考古学的資料は人間の社会生活が物に依存して残されているものである。ゆえにその目的はその生活を対象として観察するところにある。考古学に

於いて扱かうところの資料は、人間の製作であるか、あるいは人間との関係に於いて観られるものである故に、われわれの如き学術的見識の乏しい素人にあつては、たとい實際活動の場として発掘調査などに従わなくても、文献資料の研究や遺物の表面採集による調査研究等を推進することによつて、教育上の考古学研究の目的は達成されるであらう。われわれは、この祖先の生活記録・発展記録であるこの物言わざる文化遺産を、単に観察するのみではなく、その歴史的発展の中に存在する高遠なる祖先の息吹きを復原させるための学習内容であり、研究的態度でなくてはならない。それがため教師

自身の「考古学研究法」の研究が必至である。

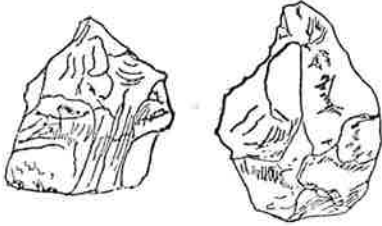


図 1

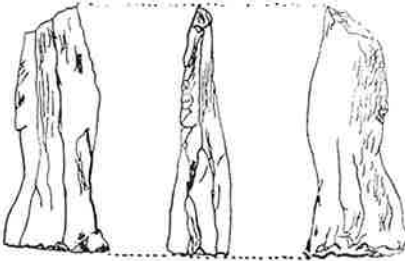


図 3

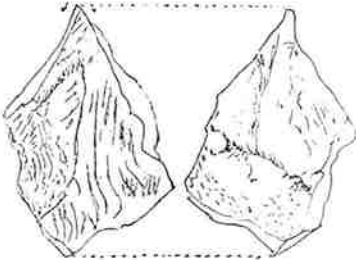


図 6



図 7

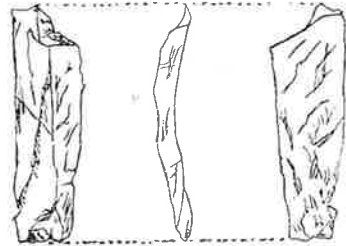


図 4

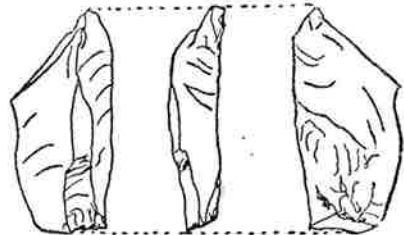


図 5

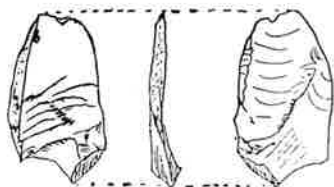


图10

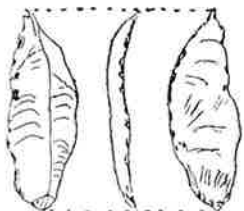


图11



图12



图13



图14



图15



图16



图17



图18



图19



图20



图21



图22



图24



图25



图29



图30



图31



图32



图33

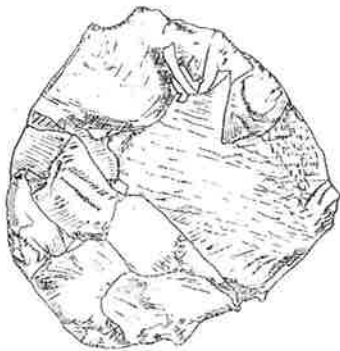


图34